

心理学の考察における情報処理技術の見直し、活用について コラボレーション吟味、コンテンツ、検索情報からの研究

糸魚川幸宏

(ウイズダム・インク)

要旨：情報処理技術は全国大会での発表で Groupware セッションに入ったということで場における刺激から想起、再認識される。まずコラボレーションが再認識され研究者の発言が具体的問題解決におけるコラボレーション活用の吟味として生まれてくる。一方、旅行におけるツイッターの利用は研究者情報に比しビッグデータ状況での情報収集となりキーワード検索が見直される。偶然のコンテンツとの出会いで旅行への有効情報が得られていたことへの見直しである。「事例」、心理学者の問いからコラボレーション見直しに入る。キーワード：コラボレーション、メール、検索、コンテンツ

1. はじめに

インターネットでのメールの利用、ホームページ発信は個人であっても自宅で多くの情報提供ができる環境を生んだ。情報処理の技術は検索によるコンテンツ収集を可能にした。ボーダーレス社会で情報空間は拡がりウィルスの発生というセキュリティの問題が日々のインターネット利用で不信なことをもたらすようになった。こうした状況で私は情報処理学会の第77回全国大会に参加、論文発表をした。発表セッションは Groupware 一般で不信状況に陥っていたインターネット環境でのコラボレーションを思い出しコラボレーションへの参加者の必要要件という形で有効性を探るようになった。また、セッション名でボーダーレスな環境から問題を絞りこんでいけることも再認した。

2. 討議の場の再認

事例データの収集方法：2015年東海心理学会名城大学大会論文「Probability 感情の想起と Making Sure の再認」で討議にふしている本人記述の方法によった。本人記述からインターネットでの事例を得た。他にアンケートによりコミュニケーションに関し収集したものとインターネットで特有と認識した bumped fact で論文の構成を行なった。

京都大学での2015年情報処理学会全国大会ではインターネットフェース、グループウェア一般には株式取引システムでの hacking の事例で参加したがそのセッションでの討議を表1にまとめた。関連して再認の心理学の大会事例を入れた。

情報処理技術の検索をこの表1の事例でみる。

- ①2008年のリーマンショックの時にキーワード検索したのは2008年11月の講演で経済評論家が「パニック状況になっている」と言ったことで金融パニックという言葉を検索した時であり石油危機と記憶しているが石油パニックと記憶していないことであった。論文に金融パニックの言葉を使えば検索によりコンテンツが言葉を公式な表現とした。
- ②2011年の東日本大地震の発生ではラジオの報道を聞いて仙台の被害を思い、その後大学で東北大学の人の地震という天災への科学論を聞いた。この過程で東北大学にいた福来という人の人名検索を行ない心理学での考え方の科学論での影響をコンテンツでみた。特に東北大学での考え方の福来の影響はないと読めたが高山に記念館があることが分かった。検索時福来、心理学入力、確認福来友吉。
- ③心理学的問題、検索によりホームページを見るがコンテンツ刺激にふれての喜ぶ不安という感情からのホームページ評価が起きる。感情とホームページを記述したデータにネットサーフィンで検索からインターネット利用を楽しむことから検索コンテンツへの不審を感じずる状況になったことを記したものがある。こうしたことは具体的人の記憶で思い出される。ネチケットを言っていた人がホームページを見ていると裏のある作り方がされているということメールで言ってきた。法外な金額を要求されることで商用にインターネットが利用されるようになった頃である。メールの信用性の問題は通信の1つの方法として電話からの指示メール発生という事例でなりすましの問題を複雑化しメール、電話指示になりすましありの事態把握を遅らせた。

時期 会場	記憶 再認	コラボへの動機	コラボへの難点
1992 年から 2015 年 国内各大学	心理学の原理、歴史、講演での言葉での文化の引用	2011 年仙台地震報道	発言者 95 歳、インターネット、メール環境研究、体験の共有性
A:2015 年 京都大学	2008 年株式取引 hacking	サイバー攻撃への認知の過程への認知共有	論点が広範囲、CVS、HCI の問題からの課長経験コラボ等資格要件想起、
B:2015 年 京都大学	2008 年株式取引ログインでの usability	個別事例生起と多くの事例での発生の意味差	ビッグデータ状況で個別事例から他事例の把握：自宅、世界での発生比較
C:2015 年 京都大学	2010 年 web メールダウンロード	IP アドレスの確認へのプロバイダー指導	インターネットでの法律問題、裁判での決着であり、システムへの考察討議でない
D:2015 年 京都大学	職場での管理職の心理学からの個人情報繰り返し	ライフログの現状のリスク	被害の認知申告までの心理学データ発生からの時間の長さ

表 1: コラボレーション (コラボと略) の場の発生、心理学での再認 注) A-D は情報処理学会第 77 回全国大会セッション

2. メールの問題 (表 1 の説明)

IEEE に Professional Communication Society という部会があり通信での倫理が問題にされていたがメールが株式取引などの商用システム、日本社会心理学会等の学会運営で問題視される使用がされた事例を提示する。

A: ①株式取引システム、利用者、学会会員の Q&A システムでの発生問題でメールを使っていて返信回答が途中止まる。事例、問い合わせ、回答依頼について返信なし。

②株式取引で無断で売られた銘柄を聞いてきて答えると (解決期待) 返信なし問い合わせに非常識ないい方で答え、そこでメールが止まる。こうしたメールでの事態は当初、証券会社での要員教育の問題と思われた。派遣労働者による職場構成も事態で考えられた。③CVS (会計システム): CVS の不正表示について担当者の携帯電話で確認したがその後 CVS は画面から消えた。IT プロとのメール不通。

④時間が事件発生 (警察通告) 7 年と経つが携帯メールの使用で送信が届いていないこと、返信受信がされていなかったこと、web メールで送信が届いていないことが日々のメール利用で分かった。いずれも定常メール利用で毎日、受発信があるシステムである。メールの特徴で送信が確認されたのはメール相手に次に会った時、次に電話を受けた時で web メールの場合は商用であるから返信がない時間経過が長いのでこちらから電話で未到着を確認した。

B: 株式取引口座でのシステム利用にはユーザー名とパスワードの入力が必要である。このログインがうまくできず利

ざや獲得の機会を失う。こうしたことが個人体験でなくビッグデータで発生事例数をみれば商用システムの usability 評価、個人攻撃という見方と違う状況の把握が生まれてくる可能性がある。この場合サブプライム住宅ローン危機で「毒まんじゅう」を仕掛けたとかインターネット基盤技術点検で「毒入れ」をしインターネット検査するという経済の専門家 (銀行出身)、インターネット基盤技術の専門家の言葉から文化的要素で事態を把握する専門外の人間の問題への迫り方が生まれてくる。ビッグデータ状況での個別事例の見方はいろいろ出てきている。事例、「IT が研究の方法自体を変えつつある」記述、謝辞「情報と科学と技術」。

C: ①2010 年 7 月、千円積立による金融商品購入開始の時の送信メールが勝手にダウンロードされたことの事例から始まる問題。②Web メールがダウンロードされた事例は、海外で二回、国内で移動時に発生、国内で外出時発生と体験してた。③海外で発生の場合はプロバイダーへの問い合わせ電話はできなかったが国内の場合はプロバイダーに電話して女性の答えを得た。この時のプロバイダー事務の異変は回答がされた後にくる問い合わせへの御礼のメールがこなかったことである。このことはメールダウンロードへの状況説明、IP アドレスに関する説明に不信をもたらす。警察での IP アドレスの関係する誤認逮捕はその後のことである。ニュースになっていないことは発生、体験で理解しがたい。④学会での討議で IP アドレスが二重に使われていた事例がパネラーから言われた。IP アドレスと web メール

ルダウンロードの間にはインターネット基盤技術の素人には因果の説明をするのに距離があり状況説明がむづかしい。

D：ライフログという言葉でのシンポジウムが情報処理学会全国大会であった。私は心理学を大学4年間学んだものであるがライフログを次のように考える。事例として学生時代の演習、卒業論文データが「本人」の勤め先において流用され査定、人事に使われることでライフログとしての悪用があるということである。流用不可であり個人情報として実験データが評価できるものであるかの吟味もいる。大学のデータ管理、収集者の倫理、管理職の判断、いずれもしてはいけないことと考える。

再認からのコラボレーション見直し

①情報処理には数学、物理学、電気工学等の分野から研究者が進出している。心理学での認知、情報処理での認知科学について1997年東海心理学会で討議の場に出した。

②コラボレーションを京大での情報処理全国大会のGroupwareセッション参加で見直したが、学会での発表討議の場として日本心理学会の1992年から2015年での開催大学での原理・歴史のセッションの場が俳句小説引用という文化面、錯視という心理学の研究で再認される。この場からの人名検索の発生は2011年東日本大地震発生の後に大学でのものの考え方に心理学が影響しているかを知るために行なわれた。人名検索からの心理学者のコンテンツは教え子の個人的記述もあり別のライフログとしてウィキペディアなどと取り扱いが分けられる。

3. メールの問題の多発生 セッションの効果

①メールにおける現実の問題は1対1、1対会社と使用者が思い問合わせに対する返信へ反応したことが時間を経て学会で発表、質疑をして反応を得るとただ警察や弁護士と話してメールできた文面を話すことと別のメール使用の問題が出てくる。問題の明確化にセキュリティスペシャリスト資格認定テスト問題を用い共通性をみる。

②コラボレーションのむづかしさにメール使用におけるセキュリティの問題の発生がある。それは表1の株式取引でのメールの使用においても発生している。メールにおけるなりすましの発生が送信受信双方において発生する。このことはメール頻度多く入金督促、正規の証券会社の問い合わせの質問応答システムで確認メール発信、証券会社指示

の入金額と所定の電話（パスワード入力で接続）への確認依頼の返信、この前に問い合わせ確認のメール受付番号が自動的に証券会社から出て受信している。入金督促メールの確認に対するメールをそのまま信じて指定の電話番号に電話したのは正規の質問応答システムを使っているからであるが質問応答システムのメール発信になりすましがあつたと考えることが今、できる。もしくはメール文面の書き直しがあつたことが入金金額などで考えられる。

③メール指示での電話で女性の名乗った苗字と言葉が記憶される。指示メール、電話での言葉からメールでのなりすまし、文面書き直しの可能性を判断したのがGroupwareセッションでの参加者の反応からである。メール送信受信におけるメールの削除、受信者が受けていないことの発生。受信メールは質問受付番号、質問内容への回答メールになる。

④メールでのなりすまし、文面書き直しに関連することで発信、受信のメールの無断削除がある。この株式取引でのメールの削除はどこで起きているか分からない。

⑤事例、届いていなかった携帯メール、中京高校生のボクシング試合案内、出された携帯メールへの返信がなくなったもの、米クライスラ-車でハッキング、日本での発生について聞いたもの、出版社宛のwebメールが届いていなかったこと。商用メールで受信後の送信で「RE:つきタイトル」メールが発生した。いずれもメールのよさのリアルタイム交信でなくてコミュニケーション可能の裏をかいたもので時間をかけて送信相手と話し機会を得て受信がなく、相手の送信が受信されてないことが分かった。

⑥ビジネスQ&Aメールシステムが逸脱して運用される。会社のメールシステムでメールhackingが行なわれた時期の見方は事例では次の気づきになる。

侵入しメール発信の事例：

心理学的問題としてこうしたハッカーによると弁護士がいうまでの株式取引口座の心理学的問題を書き出してみる。

メールでどこの株ですかと聞いてた。アライドテレシスHDと答えた。

この場合、メールでの質疑で解決してくれるという人間信頼の発想があつた。

もう一つは要員教育の問題と思う気持ちの出ることで相手がメール受信後の発信で文面の画一性、乱暴さを感じさせたことで要員教育がされていないか、移動性労働提供の派遣労働者がメールしていると考えた。自宅のパソコンHCI画面のむこうは見えないがイメージはわく。

HICI 異変：維持率の変化についてメール問い合わせがされたが答えをしないということが起きた。また勝手に売る乱暴さが起きると対処をしないで返信なくした。維持率を表示するソフトウェアがおかしいと判断した。請求金額が株を売ることによって少なくなる金額変化が画面に起きた。

4. ハッカーの具体性

①**対人**：メールでの質問で証券会社の担当者であれば当然、口座利用者の銘柄が分かっているわけで、この場合、メール利用への侵入者があったと考えられる。その状況もみえないところでの推察になる。具体的にアライドテレシス HD と銘柄を書いたが対人心理学の問題として会社の社長、株主総会での発言、学会での知り合い（社長、講演、事務所訪問）との人間関係が出てきて感情、記憶のレベルではメールの問題は拡がり複雑化する。

②**メディア、言葉の問題の分析**：京都の哲学者、情報処理学者で金融事件と別に以前から考察に引用することがあった。振込詐欺事件では可児、半田、尾張旭、中津川と近くで聞く事件発生地で報道を聞いて想起することが違う。これらの心理学的問題は時の総理大臣の言葉で事態把握を聞き個別発生における関連性想起を示す。

例、ラジオ、麻生総理が田舎では証券会社を株屋と言っていると伝えた。また、派遣を切るなどと言ったと伝える。

心理学的に言葉の受け止めを個人でどう聞いているかということの分析がある。例への反応、田舎は熊本で横浜から転勤した知り合いがたまプラーザの支店でのことで株屋と言ったことが回り情報となった等。

こうしたことは民主党の野田佳彦総理大臣の国会答弁での民主党代議士の北朝鮮への渡航についての言葉「(代議士の)功名心だ」にまで拡がる。いじめ取材のジャーナリストから国会議員になった人が野田答弁の人だが証券会社のメールでの質問への回答で「それは追証切れのことか」と答えてきたことがあり居住地近くで講演を聞きたいいじめ取材ジャーナリストを想起した。国会での野田総理の答弁はそのジャーナリストの動きとメール文面が想起され特定な人の動きと思う情報が国会で得られるが情報の世界でのことで現実には捉えていない。情報発生とテレビでの現実 long distant な問題と省略しないで本人記述で事例とした。

新しいニュースの発生で対人を見る会社が出てくる。アライドテレシス HD と同様に勝手に売られた株、東芝で 2015 年 7 月に経営陣 3 人の退陣というニュースが出るが株式取

引での個人事態では 2008 年の売られた日の前日に元東芝社員のプロモートのドイツへの投資の東京での集まりはすぐ東芝売りの理由として思いつかれていた。Invest In Germany のホテルでの会はその後行なわれていない。

5. コラボレーション・セッションの構成

現実からコラボレーションから迫る場合、どのようなメンバーで討議を構成するか、メンバー間コミュニケーションの方法、メールのセキュリティの問題が残る。本人記述の分野として情報処理の研究会論文としてでなく社会の問題と認知される記述が考えられる。コンテンツ発信に反応をとりコラボレーション・セッションの構成に國藤進の提唱するアクティブ・ラーニング（創造思考とデザイン思考の統合）からコラボレーション環境設置をみる。アイスブレイキングへの対処、チームの決定、チームの課題、アクティブ・ラーニング場の創り方、ファシリテーターの育成が國藤進の情報教育での意見である。表 1 にあるように京大での全国大会 groupware セッションでは課長経験者でコラボレーション研究者という資格要件を思い、女性参加者の反応で電話、メールへの複雑仕組みが単なるなりすましでないと判断できた。発表と同様に発信への考察をしコラボレーションのセッション考察を再考する。

6. 文化の記憶、心理学からの見方、ニュースの伝わり

6-1. ソーシャルメディア 電子掲示板事例

直接の討議が groupware のセッションがであってもコラボレーションの範囲が HCI の usability、メールの信用性、ビッグデータ活用における問題解決と広くメディアを通しての総理大臣の言葉、会社経営のリーダーの言葉が伝わり関連の言葉で想起が出る。コラボレーター側、事例で株式取引での被害者、さらに拡げれば振込め詐欺の被害者側の場合の発信環境はどうであろうか。電子掲示板、Facebook という social media は効果的であろうか。電子掲示板での事例、東京の大学のクラブ活動等中心の電子掲示板、書き込み発信をし場所をえるがある時間において電子掲示板が誰かに整理され発信コンテンツは消える。無料の発信だったが掲示板に掲載されてからのコンテンツ付加価値はどう評価するか。大学の情報はコンテンツ制作で大事である。You Tube 利用でその比重は高まった。掲示板からのフィードバック

がないのは大きなロスである。大学関係の電子掲示板に場所を取ったのは知り合いの卒業生、野球部の選手、教授などとの対人心理学があり削除はメンタルに悪く教授の逝去を思う。電子掲示板への掲載はマン・マシン・コミュニケーションでの研究成果のフィードバックと共有である。卒業生はマン・マシン・コミュニケーションの職場にいた。東日本大地震のラジオ報道で若草区、荒浜、遺体が2百浮いていると繰り返し流れた。実際は若林区であるが私は岐阜県の故郷近く出身の詩人小説家島崎藤村が卒業した明治学院大学電子掲示板での反応が知りたい。

インターネット通信ができることは思いもよらぬことができる。こうした所感が電子掲示板利用で出てくる。

新居ギャラリーの電子掲示板、絵画への感想で書き込んでいて大地震で地震、津波への反応を書き込んだ。被災地を思うと遠慮勝ちの書き込みであったが検索ではできていた。

ある日、内容確認すると地震発生後最初の5日分がそれ以前の絵画所感と合わせ消えていた。名古屋大学での日本社会心理学会での大地震考察論文をリンクした。岩手の萬鉄五郎の絵画「雲のあう自画像」(1912年)への感性処理等東北の文化と知人の岩手大学卒の人のことなど具体的発信が大地震以降書き込みでされた。書き込みはラジオ報道への反応が記憶として掲示板が閉鎖されても残る。

通信が文化的に考察されることは鈴木常彦講演でのカミンスキーのインターネット基盤記述への論文紹介で掲示板についても考察が伸びる。

Facebook の usability : Facebook での発信は 2015 年 1-3 月行

なったが発信コンテンツが消されていくのでパスワード入力ができなくなった状態で利用を停止した。コンテンツは残っている部分があると思われるが国際学会のホームページにある Facebook の案内で先の Facebook と別のものと思い登録ログインをした。自分で保管コンテンツを消した可能性がある。このことは Facebook のアメリカ本社に聞く必要がある。「イスラム国」日本人人質事件での発信ができたがこうした発信を過大的評価するのは 9.11 テロでのニューヨークからの日本人女性のホームページ発信への認知、評価の高さが日本で受けられていたことへの記憶による。

LinkedIn : LinkedIn は自己記録を入れ希望の人と人間関係を結ぶことができる。人名検索でできるコンテンツとなりメールで接続の人に連絡できる長所がある。その長所から利用を勧める人がいる。謝辞、「情報と科学と技術」。

自己記録が経歴、仕事で公開でき日本、海外で人間関係につながりができた。現在、検索では表示されずメールもうまく使えないがインターネットの人間関係形成で有効である。セキュリティには対人関係のメンタルでの判断が入る。電子掲示板は今も活用されている研究者がいて連絡などで便利である。Lion の家で「荒らし」を指摘され今は閉鎖されている教育工学研究者はクイズに特化した電子掲示板の研究をされている。電子掲示板などのソーシャルメディアの usability のデータはビッグデータ源として利用の方向が考えられる。表 1 B の 2008 年株式取引ログインでの usability は Facebook でもログイン不可問題が起きビッグデータで検証の必要がある。

Name lecture & co.	Research subject	Univ.	html by name searching
A:Suzan Fiske Tukuba Univ.	Social Psychology * Prejudice and Stereotyping	Princeton University	https://fiske.socialpsychology.org/ Online Media (USA)
B;Lorrie Cranor WWW9 2000	Privacy Password	Carnegie Mellon University	http://lorrie.cranor.org/blog/2013/12/09/password-dress/ http://lorrie.cranor.org/ (USA)
C:Angela Sasse Interact 1999	Science of Cyber Security password dress	UCL	http://sec.cs.ucl.ac.uk/people/m_angela_sasse/ http://www.dcs.gla.ac.uk/i99/ (England)
D.Johan Fornäs e-mail, post mail	Digital Borderland, Media and Communication Studies	Södertörn University	http://www.johanfornas.se/?page_id=2 (Sweden)
E.宮田加久子 Japan 日本社会心理学会 2010年広島大学	Social Psychology Twitter 右論文共同者山本仁志, 小 川祐樹, 池田謙一	2013 Died Former Prof.	Twitter における意見表明の規定要因: 近傍ネットワ ークの同質性とオピニオンリーダー性による検討 ICS 研究会 2013年日本人工知能(AI)学会

表 2 心理学者、プライバシー、セキュリティ専門家の発信コンテンツ

6 - 2 検索、コンテンツ、リンク

①検索で心理学の考え、プライバシー、セキュリティ、ソーシャルメディアの知識を引くことがでてる(表2)。インターネットのコンテンツの得られる場所に対しても trust, distrust がある。Suzan .Fiske のステレオタイプの考え方でいくと岩手、仙台、高山へのステレオタイプという観点でそれぞれの場所をみる側の群がいることになる。インターネット上のコンテンツに対しても、群データがいることになる。これは社会心理学のテーマで地域と地域の交流は interact の問題となり情報処理の分野での海外学会もある。

②Interact の学会で Angela Sasse と交信したが検索での再認では研究分野が次のように出る。Areas of Interest

* Human Vulnerabilities in Security * User-centred Design of Security * Privacy, trust, identity

* Security Awareness-Education-Training

* Security Management *Economics of Information Security

* Insider attacks 現実にはセキュリティの問題で交信はなく日英外交のテレビでのニュースでコンテンツを理解することになる。研究者の知見は発信コンテンツになる。雑誌編集企画の事例で検索されたコンテンツをホームページにリンクし保管しておいて8年目を迎えてもリンク先が健在である確認ができた。ツイッターへの社会心理学的考えも pdf をリンクしていくことで生きる(表2)。

③知見利用は有料であるという意見はシステム科学のコンピュータ利用における応用の頃に聞いたが、ただ Amazon に本をおいてあるというのでコンサルタント的に質疑でのコミュニケーションがあれば有効と考える。公開講座が大学で持たれているが大学、社会でステレオタイプがありメール利用でも各大学で違うように考える。ホームページも図書館での利用からみると HCI で異なりがある。ソーシャルメディアを使った発信により意見収集の拡がりをもつ。日本語と英語が発信に使われ「Culture Studies, Borderland」という海外での研究の再認となる(表2, Johan Fornäs Sweden)。

④情報処理の分野でコラボレーションの再度の活用ということはメディアで会社、政治の動きが伝わることでそこで商用コンテンツを制作し人の関心、注目を引く情報発信が生まれる。その場合受信する側の場が大学、学会、広くボーダーレスな社会の場で考えられ個人のネットワークも重要視される。直接的コミュニティ会合は逆に必要となる。メールの安全性の問題はこの検索コンテンツ発信者とのコミュニケーションでも起きる。大学の個人メールがパスワ

ードを必要としたこと、メール文面が削られたことなどであり大学、学会関連の電子掲示板と教授の動向と関係あると思えることなどである。Probability の究明がいる。

⑤コミュニケーションに知識保有者の教授が相手となるとメールでの問い合わせがその分野にされ問題解決にむかう場合相互無料ですむことでなくコンピュータ利用でシステム科学を研究室で語る教授に訪問者が謝礼が必要と言われた知識産業時代の始まりと事態が重なる。Interact にリンクされていた chat は有料会員制となった。Amazon の図書表示に内容に関する問い合わせシステムが付加されることも考えられる。インターネットの基盤技術に関することは研究者側から大学での教育を求められるレベルが言われる。ソーシャルメディアで拡大したコミュニケーションの機会は facebook などの usability と並行しプロフショナル・コミュニケーションの分野の特定を生む。

6 - 3 .ホームページ運営、プロバイダーの動き

ホームページの問題から折りにふれ会い事態の大きさの判断で政治家に問題をいう対人関係が発生する。この場合2012年に起きた中央官庁でのサイバー攻撃より前で適正な言葉の使用等説明に苦慮した。直接、警察、弁護士にふれあいを持ち国会議員が元検事ということも ICT と法律問題の学会質疑で出る(表1C)。ホームページで見る事、検索で起きる事もいくつか事例を経験することでその時の人とのふれあいで問題が社会的なものになっていることが分かる。

6-3-1 事例 A, 文字化け、ウィルス、トリッキーの発生

ホームページ発信、受信におけるセキュリティの問題が学会関係でも起きてきた。2001年の大会(European Conference on Developmental Psychology)でプログラム、アブストラクトで大量の漢字の文字化けがアルファベットの文章の中に起き漢字故の日本人へのセクハラ意識の発生が起きた。漢字の文字化けはフィンランド等の大学のホームページでも起きていた。こうしたことはホームページ制作での侵入者によるものと思う心も出るが漢字化けが doc 保存で残りテキスト保存で消えることが確認できた。結果としての問題の発生について身近でふれる国会議員、文部科学省役人に確認しておく問題ではある。漢字の問題としての日本の責任の可能性である。このホームページでの異変のことでの政治家とのふれあいは地域発信ホームページでされる。海外の学会コンテンツでの問題は2004、2005年とアブスト

ラクトを収納した CD-ROM に起きて特定人名でウィルスが出たり漢字化けになった。体験から reasoning が起きるが当初はフィンランドでのサウナ事業での検索コンテンツの不審からの連携進捗への影響、日本人研究者の関係研究者のホームページでの漢字化け発生で警戒のメールの送信が起きたりする。対人関係にインターネットの問題が影響を持ち始めたのである。

インターネット利用で原因に probability の感情がわくが making sure に直接の確認でなく reasoning としてもうずいぶん前の話での通信状況での類似事態が確かな記憶でなく思い出され逆に発生問題の規模の大きさを感じる。2006年、アテネでの国際応用心理学会でのアブストラクト登録で1つ登録し2つ目を登録すると自動的に落ちるようになっていた。こうしたことで HCI、ソフトウェアの問題として 2004 年の北京での国際心理学コンGRESで百語のアブストラクトが締め切り直前、九十九語にされていたことを思い出す。こうしたことは会場への学会運営の問題への苦情、大会長のコンテンツでウィルスが出たというを思い出させウィルスにしても個別の発生でない全体的な攻撃作戦があるような考えができる。

⑤メールの問題は社会心理学会では開催大学で返答あるなしが違ふと想起され、国際心理学コンGRESでは北京、ベルリンと開催地で学会運営への介入が違ふと体験事例が思い出される。リーマンショックのあった 2008 年の株式取引口座、国際心理学コンGRESの体験ではハッキングという operation が弁護士により指摘され 2008 年であることでカミンスキーがインターネットの基盤技術について論文を出した年と同じという認識ができる。カミンスキーは中京大学講演で鈴木常彦がインターネット基盤技術の問題指摘の論文を出したと認知されていた。

ここで心理学者、インターネット基盤技術学者と株式取引、参加学会での被害者とのコミュニケーションが可能かという問題になる。専門家と被害者、(時には心理学者、コンピュータ科学者である場合もある) の間のコミュニケーションで警察、弁護士と直接相談、苦情処理に行く場合と異なる

ったコラボレーションの場が生まれそれが問題解決を早める知恵を生むことが考えられる。

6-3-2 事例 B, プロバイダー運営 消えたホームページ

①知り合いのメールでの infoweb 加入者ホームページ案内を受けてメールごとに見てた。ある日、メールが消え検索で出てたホームページも消えた。そのことで書き込み送信できた対人関係も消えた。

②ホームページ検索表示での感覚的判断に事業支配がありホームページ発信者を下請け、作業という仕組みにしているものがあり取引、事業のハッキングにつながる動きと考えられるように事態の推移で 2000 年からの 15 年で判断できる。

③NTT コミュニケーションの OCN でサービス停止期限通告日より早くサービス停止によりホームページが削除された。検索ででていて交信していたものは少なくみて 3 つである。2 つは情報処理学会に関係して発信されていた。ホームページへのサービス停止は郵便物で行なわれたが封筒の住所への文書所属組織名への問い合わせの葉書は宛先不明で戻った。通告期限より 2 日ほど早くサービスは停止されホームページは停止され OCN でのホームページは消えた。

この過程で経費がカード引落で請求書領収書が省略されお客様番号がすぐ分からず指定の 0 1 2 0 番号での連絡ができず問い合わせ葉書が受取人不明で戻ることと通告期限より早くサービス停止が行われてホームページ発信は止まった。表 1 での事例 C のプロバイダーと利用者の裁判を思う。問題は発信 html コンテンツの時価評価となる。なぜ削除を急ぐ必要が OCN にあったかである。ウィルス発生、プロバイダーでのウィルス故のホームページ発信停止の長期化(1ヶ月)という事態が 2013 年 2 月から 3 月に起きた。ホームページ発信がプロバイダーの管理と経費の削減として不審な問題を生む。通常の企業のサービス、コンプライアンスからは考えられない措置が起きている。ハッカー介入か事態の見方は弁護士、基盤技術研究者で異なる。

通信メディア	発信組織	Person	メール事態としての想起
A: Hostelling 雑誌創刊号 郵便	日本ユースホステル協会	MIT 石井裕の表紙	事務局機密漏れ 論文 fax 請求の異例
B: メール pdf でのプログラム	日本心理学会	JPA 発表者	同姓同名からの特定、高齢者発表確認
C: 年次大会論文集 郵便	JAIOP シンポジウム	申紅仙 企画	テーマ Reject される査読への対処

表 3: bumped fact 現状分析を課題とし問題の共有性をみる JPA: 日本心理学会、JAIOP: 産業・組織心理学会

7. 考察

7-1 時期と問題発生 事例をみると情報処理技術の問題は日本社会の事態、世界の動きと離して考えることはできない表1をみると株式取引口座での勝手な売りの発生、プロバイダーでのメールダウンロードでの問い合わせ応答の問題があり4章でプロバイダーでのホームページサービス期限前停止、プロバイダーでのウィルス故のホームページ発信停止の長期化(1ヶ月)という事態は振込銀行から警察、法テラス弁護士、警察の認知、判断、対処の流れとプロバイダーのIPアドレスでの警察との接触指示、コンテンツ評価の見積もりという問題とメール、ホームページを介しての交流機会、セキュリティからコミュニケーションなし状況発生被害見積りの問題が2008年10月23日のネット証券での発生と東日本大地震の発生、学会での対処、電子図書などのコンテンツ開発、情報発信の事業がスノードン事件などの個人とプライバシー情報の機密保持と政治とのかかわりで注目された時期にあったことになる。

7-2 コンテンツ受信発信でのメール、検索、リンク

メールはコラボレーション、商用取引口座での連絡でその信用性が疑われる時期となった。コラボレーションでもメールになりすましの詐欺ができればメール利用はとまる。

検索はコンテンツ受信発信の経緯を見直すとコンテンツ制作、研究への刺激としての役割が認められてくる。①NTTの検索表示で出たホームページは海外学会への登録official siteで制作されたもので検索されることで更新が促進された。②次のフェーズは検索表示されることでの不審の発生でホームページ、事業の所有をハッキングするような表示が自他でみられた。③2003年の海外旅行でモバイル中のコンテンツ検索の必要性を見つけコンテンツ制作をモバイル対応で考えた。軽く画面に出ること読みやすいことである。④経費削減でプロバイダー数を削ることでコンテンツの整理統合も起きた。検索は自己制作のコンテンツ吟味と離すことができないものでありメール不信であれば検索で出るコンテンツ発信が重要視される。

7-3 現状のインターネット、メール体験の共通性

予告なく受ける郵便、メールでのインターネット時代の特

有の偶然出会う事例を3つ上げ本論文の社会、学会で共通性が確認できる考察をする。

A: 国際学会で論文の質向上目的で石井指導がついたが採用なしで終わった。メールで査読登録番号が分かってしまう返信要求のメールがきた。とんでもないfaxでの登録論文の再度の送信が求められた。石井は自分の体験ではファイルがこわれていたことを言った。メール利用での機密性なし、ファイル送付の安全性がないことが分かった事例。

B: この学会の個人情報管理で気にしたのは大地震の2011年、日本大学大会でのインターネット登録での個人情報と会員名簿情報の存在が重複し勝手にメールアドレスを学会論文誌で修正情報で印刷されたことだ。別にメールでの学会論文送付が未到着で再送することは2014年感情心理学で起きた。

学会ホームページ画面からの論文登録不具合は情報処理学会の東海支部で2013、2015年起きている。

C: シンポジウムのテーマ「投稿論文リジェクトを避けるために出来ること」は開催前であるが(8月30日) rejectの言葉による想起記述、組織問題としての論考への本人記述はprivacyに入り表2の学者の知見、学会体験に質疑する今後の課題がでる。

謝辞

インターネット利用の現実の問題における usability 事例、コンフリクト事例の提示において早く電子掲示板利用のLionの家(竹内俊彦) お猿(飯島泰裕) 岩手マルチメディア研究会で歳時会后 IEEE で功績の吉田等明、出版編集永野健康、著書多数竹下亨、図書情報管理、記述データ提供早稲田大学ライブラリアンの会、MIT 石井裕、情報教育國藤進、コミュニティとインターネット上田謙一、本間一郎、システム工学方法論(A.D.Hall) 関連者様。JAIOP「投稿論文リジェクトを避けるために出来ること」企画、参加者様、明治大学シンポジウム成功を祈ります。

「情報と科学と技術」2014年No.6、天野絵里子、2015年No.3 古賀めぐみ(敬称略)。学会参加の事務において運営システムで所定の手続きができない時の電話による依頼ではからいをしていただいた方、受ける必要がないという言葉が記憶される中で厚く感謝します。Web日記からツイッターまでの社会心理学研究者の方々。検索ではコンテンツ、消息は分かりませんがAPCHIでお会いした方々。今後のワークショップなどに向け感謝。Wisdom Inc.